ケイト・フレロン・ヤコプスンの著作と資料

フレスリウの女たちの中で
『ベルリンスク・アフテンアヴィース（夕刊）』1945年5月11日

ケイト・フレロンは吊るし首にされるべきか？
『インフォメーション』1951年6月16日

北朝鮮からのレポート：朝鮮が焼き尽くされている
『自由デンマーク』(10巻4号) 1951年7月

別の世界への旅　ーチェコスロバキアの印象
『自由デンマーク』(10巻6号) 1951年9月、12-16頁

別の世界への旅Ⅱ　ーモスクワでの発見と再発見
『自由デンマーク』（10巻7号）1951年10月、5-8頁

新しい世界との出会い　ーWIDFの世界女性大会から考えたこと
『自由デンマーク』1953年4号　9-10頁、14-15頁

朝鮮での恐るべき絶滅戦争　ーベトナム戦争のための手本
『インフォメーション』1969年12月3日

＊本文中の註はレアケ・シュタイマンによる。
＊これらの記事とともにあった写真については、それらのキャプションのみを訳出した。
＊……の部分は、英語原稿が欠落している部分。推測できる訳語は【　　】で挿入した。

Blandt Kvinderne i Frøslev

フレスリウの女たちの中で

'Blandt Kvinderne i Frøslev' : Berlingske aftenavis. :1945-05-11
『ベルリンスク・アフテンアヴィース（夕刊）』1945年5月11日

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高巌　訳

4月11日、私はフレスリウの収容所から解放された。私の強い願いは実現され、再び自由の身となった。愛しい人々と再会するという何か月間も夢見てきたことがついに現実のものとなり、デンマークのブナ林で春を迎えたいという深い願いはかなえられた。私は幸福だというべきではないだろうか！ 最初の数日はほとんど私が信じてきたとおりであった。しかしその後、当初はかすかな不安と感じていたものが、次第に私のまわりに網を広げはじめた。私は束縛され遠ざけられているように感じ、理性が認識を拒絶するある奇妙な罪の感覚にとらわれた。あらゆる合理的な想定にもかかわらず、戦争が終わる前に解放され、それゆえにフレスリウ収容所の運命が決まる最後の不確かな時期に同志たちと一緒にいられなかったことは、私の過ちだったのではないか？ そうした時期が－秋に、冬に、そして約束された春の日差しのなかで－やってくるというのが、バラックのまわりを一緒に歩いている私たち皆の思考の焦点だったのだ。私は自分が共同体を裏切ったように感じた。私は偶然によって収容所の外に出ることができ、アネモネやレンギョウが忘れないだろう肖像にとって代わった。フレスリウはこの新しく発見され呼び戻された日々の生活の背後にある影のかかった現実となった。

今では私が有刺鉄線よりも強い何かで縛られていたことを認識しているが、収容所に存在しているということは奇妙なもので、その閉ざされた境界線のなかでは、非常に多くのことを心に抱くのだが、そのようなことは他の場所では決してないだろう。普通の市民的なふるまいが通用しないこの場所では、人間や事件が新しい言葉で言い表されている。ドイツとの国境から数キロのここでは、人々は「どちらを選ぶべきか」というスローガンの下で生きていた。

逮捕されたとき、私はフレスリウ収容所のことをあまりよく知らなかったが、その位置は危険を感じさせた。情勢が要求するならば、囚人たちは南に移送されるのではないか？ 疑いなくそのような計画はあった。しかし、西刑務所の情報機関がトイレの壁に刻んだメッセージが希望を与えた。それは「フレスリウを恐れるな」、「デンマーク人は偉大な自由を提供する」と書かれていた。それは頼もしく思えた。40時間の眠れない旅を経て最終的にこの収容所に到着したとき、私は失望した。さびれた平野のなかの暗い松林に面した黒がかった茶色のバラックが、降り注ぐ雨にかすんで見えた。なんとも悲しい光景ではないか？ いや、しかし、何か月も柵の付いた窓から雲がただよう灰色の空を眺めていただけの人々にとっては

ひとつの啓示であったのだ。その木造のバラックにはドアに取っ手があり、内も外も好きなように歩くことができて、宮殿のようだった。寝台に横たわると……クリームをいっぱいにのせた……とドイツのバターや焼いた豚肉を挟んだパンがあり、星が輝く夜空が見え、私は自分の経験に満足するところだった。松林から吹く静かな風は私にほとんど完全な自由の幻想をもたらした。しかし、それは壁に沿ってせわしく動く警備塔からのサーチライトの光線によって突如としてさえぎられることになる。ーそこで私は自分が囚人であることをあらためて思い出すのだった。

西刑務所に数週間から数か月いた後にフレスリウに送られたほとんどの人々、オデンセのフスマンズ高校やヘルスィングウーアのヴィベア、あるいは全国の他のドイツのひどい監獄にいたほとんどの人々にとって、新しい環境は大きな改善であった。十分な食料があり、必要な人には特別な配給もある。新鮮な空気があり、共同生活がある。私がこの収容所に到着してまもなくの頃、ある若い少女がこの収容所にいるくらいなら西刑務所に戻ったほうがましだわ、と言った。私は彼女の態度がまったく理解できなかった。しかし後にー彼女と同じ意見にはならなかったがーその考えは変わった。ある人々にとっては絶えず 8 人から 10 人の女性たちと同じ部屋にいることはとても苦痛なのだということが分かったからだ。そうした人々は刑務所での生活に戻ることをむしろ望んでいた。私たちのほとんどはときおりこの世界から隠れることさえできないという絶望に襲われた。

これはフレスリウの同志愛の裏側だ。フレスリウでは鎖でつながれているわけではないが、隠してきた感覚が抑えきれなくなり、涙がまぶたの裏側を熱くするときに都合の良い場所がない。行くことができる唯一の場所は、有刺鉄線の張られたフェンスの南角にある砂利の山だけだ。一人にはなれないが、そこにさびしく立ち、なんとか自分をコントロールしようとたたかうのだ。その無言の背中は、近づいてくる人を脅かすように挑戦的だ。

私たちがフレスリウに到着したとき、そこには 50〜60 人の女性がおり（最終的には 150 人近くになった）、互いに隣接するふたつのバラックに分けられていた。男性用の大きな収容所は鉄条網で分けられていた。

ドイツ人はフェンス越しに話すことを禁じたが、それはしばしば破られ、包みや手紙が有刺鉄線を行き来した。ドイツ人は好きなように脅したり罰を与えたりすることができたが、そのやりとりを止めることはできなかった。それはフェンスを隔てた双方に大きな勇気を与えた。

女性たちはフレスリウで何をしていたのか？ ほとんど何もしていなかった。ベッドを整え、交替で部屋を掃除し、かまどに火を入れる。これが毎日、あるいは 10 日毎に続くのだ。それ以外にはバラック全体の掃除に関係にした仕事がある。…2 週間に一度床を洗う。その他に女性囚だけの雑用として、収容所の靴下の破れ目の修繕があった。靴下は信じがたいほどいっぱい穴が開いており、つま先やかかとの部分がなかったり、時には上部がないものさえあったけれども、つぎあてをする場所の要領を飲み込めば、たいした仕事ではない。収容所の衣服を登録する事務所もあった。

収容されていた 5 か月間のうち、私は毎日 3 時間この仕事をした。ドイツ人の警備員にとっては私たちがすべきことを見出だせないということは日々の悩みだった。彼らは時折り、すぐに洗濯を始め、収容所の衣服を分類して洗い始めるように言っていた。国立博物館の審議官エレン・アンデルセンがその長に指名されたが、彼女がその責任をこなすことができた

のかどうかは証明されなかった。計画を開始すべきこの技術的専門者はついに現れなかった。こうしてドイツ人は女性囚人が何もしないということを受け入れざるをえなかった。

私たちは午前6時半から7時の間に起床した。1時間後、4列に並ばされ、金切り声をあげるドイツ人の警備兵ードイツ人兵士はいつも金切り声をあげていたーにガードされて、有刺鉄線の張られたフェンスの外に連れ出される。私たちの収容所のメインの道路を下って前方にある部屋に行く。そこが食事用のバラックだった。他の食事の時間は午後1時ごろと午後6時ごろにあった。西刑務所での噂は間違っていた。食事は悪くはなかった。私たちによい食料を提供してくれたデンマーク政府のたゆまぬ努力に感謝したい。朝食は……ミルクと砂糖の入ったオートミールのお粥、パン、ライ麦パン、コーヒーだった。昼食は甘いスープ、バターミルクスープ、トウモロコシのプリン、野菜スープなどで、夕食にはぶつ切り肉やレバーの伝統的な食事*1で、ある週は魚、その次の週には豚肉とサヤエンドウ、白キャベツ、緑キャベツなどの炒め物が交互に出た。日曜日には焼肉を食べることができた。夕食にはパンとチーズと2、3の添え物がついた。バターは欲求を満たすのに十分なほどあった。夕食にはビール、ミルク、紅茶がテーブルに並んだ。収容所は1,000人を収容するように造られていたので、収容者が2,000人かそれ以上になると食料が不足してきた。肉体労働をする男性は空腹をしのげなかったが、私たちにとっては配給はそれでも十分だったので、私たちは配給物をとっておき、パンやソーセージ、パテを包んで有刺鉄線越しに男性の同志たちに送った。

私たちはどのように時間をつぶしていたのか？ 収容所の言葉で言われているように、本を読んだり、縫い物をしたり、編み物をしたり、カードに興じたり、バラックの周りをぶらぶらしていたのだ。私たちは何時間も重い泥のなかを歩き回った。自分の仲間内では何年過ごしてもおそらくは知ることができないような人物を知るのはこのそぞろ歩きのときだ。フレスリウでは……な抑制に囲まれた生活はなく、関係は他人によって決められる。ここはすべての社会的境界線が取り払われているひとつの社会なのだ。

男も女も皆、「dus」になった。*2 外部の日々の状況は、夕食の肉を手に入れたり、ガスの配給を確保したりすることよりも大きな問題に直面しており、人々は慣習を捨て、自分たちが最も必要としていること、すなわち連帯を欲した。そのため会話は豊かなものになった。それはあれこれの女の会話ではなかった。彼女たちはよく現状を耐えしのぐ方法、未来に向き合う方法を見出そうとした。「もし私の息子が死んだら。もし夫が処刑されたら。もしドイツに送られることになるとしたら」ーこれは絶望の叫びに聞こえるだろうか？ そうではない。それはもっとも悪い可能性に正面から向き合い、もしそれが起こったときに備えようとする真剣な試みなのだ。それは不幸に打ち克つ力を強めようとするものだった。それが無駄ではなかったということは明らかだ。フレスリウで泣き声を聞くことは滅多になく、神経質な発作もなかった。ドイツ軍が息子を射殺したという知らせを受け取った女性たちは一言こう言った。「デンマークのために死んだ息子の母親であるということは誇るべきことじゃない」。

---

*1 Forloren hare, Frikadeller という食べ物

*2 以前はデンマーク人は、知らない人を丁寧な「De」で呼び、友達や家族は「du」で呼んでいた。親しくなって、「De」ではなく「du」で呼ぶようになることを「At blive dus」（dus になる）と言う。

もし好奇心の強い男性が午後3時から4時のあいだにH17とH18のバラックに立ち寄ったとしたら、すべての部屋の女性たちがパンを焼き、紅茶を飲んでいるのを見て、ここは17歳から70歳までの女性のために居心地のよいペンションだと思うかもしれない。私たちがよく寄宿学校の生徒のようだと感じていたように、それはまったく間違っているとは言えないかもしれない。ただひとつ違うのは、私たちの世話をする厳格な教師ではなく、ドイツ兵がいることだったが、なんとかしてその目を盗みだまそうとするという点では同じだった。私たちは時々、何時間も恐れや不安をすべて忘れ、学生時代以来なかったほど笑い転げた。それは良いことだった。しかし、私たちに襲い掛かろうと待ち構えている不吉な雰囲気が、同志たちの運命の不確かさについての苦悶とともに、つねに漂っていた。拷問、病気、死、そして「ドイツへの移送」の知らせは、悪夢のようにフレスリウ収容所にまとわりついていた。兵士たちがバラックからバラックへと押し入り、ドイツ行きとなった人々の名前を叫ぶのは朝の5時か6時頃のことだった。噂はすぐに女性たちのバラックに届き、ゆらめく炎のように恐怖が私たちの心に宿った。自分の息子が、自分の夫が、自分の友人が連れて行かれているのか？ 私たちのうちの誰かが連れて行かれているのか？

暗く霧の深い冬の朝、私たちは鉄条網のそばに立ち、群衆のなかで最も近いバラックの入り口から出て行った人物の姿をなんとか見つけようとした。出かけていって別れの言葉を告げることが許されるのは稀で、親しい家族が出発するときに限られていた。「ニルス！さよなら、ニルス！」と女性が叫ぶと、霧のなかから大きくはっきりした声で「さよなら！すぐに戻ってくるよ」という答えが返ってきた。そうして男性たちはナチの強制収容所の地獄へと行進していくのだった。

11月28日に移送されてきたときには、10人の女性の名前がリストに挙げられていたが、ナチの親衛隊少佐がドイツにある自分が管理する収容所にこれ以上女性を送ることを許可しなかったので、その名前は削除された。12月11日、この同じ女性たちは釈放を言い渡された。しかし、1時間半後、彼女たちの喜びは終わりを告げた。釈放というのは誤りで、彼女たちは西刑務所に送り戻されることになっていたのだった。彼女たちは12月14日にそこからドイツへ移送された。なぜこの10人だったのか？ 誰もそれに答えることはできない。彼女たちの前や後の多くのケースがそうであったように、彼女たちはゲシュタポの犯罪的な気まぐれの犠牲者であったのだ。

フレスリウの女性たちは初期のころは、非合法活動に関与した容疑の女性か、自由の戦士の代わりに人質とされた女性だけだった。しかし、末期には政治囚の収容所に何もしていない若い女性たちの集団も混じっていた。彼女たちはドイツ国防軍の兵士に伝染病をうつしたか、ドイツ兵から何かを盗んだか、あるいは他の何らかの方法でドイツ国防軍の信頼を損ねた女性たちだった。この収容所のゲシュタポの責任者はこうしたドイツからの女性を使って女性バラックの状況についての情報を手に入れようとした。しかし、彼女たちはそのためには愚かすぎたので、結果は良いものではなかった。彼女たちの存在はきわめて不快だったが、しかしこうした女性たちはフレスリウの【収容者たち】に影響を与えたり、私たちの喜びと悲しみの連帯を妨害しようとしたりはしなかった。このことは私たちの同志的関係の擁護すべき忘れがたい部分だった。

「すぐにすべてが終わる」ーこの言葉で互いを励ますことができなかったことがどれほどあっただろう。今ではすべてが**終わっている**。そして誰もが家路につこうとしている。緑の

ブナ林と花咲き実を結んだ木々があなたを待っている。

Bør Kate Fleron hænges ?

ケイト・フレロンは吊るし首にされるべきか？

Information. - 1951-06-16
『インフォメーション』1951 年 6 月 16 日

無署名記事
レアケ・シュタイマン／池田高嶽　訳

あるイギリス下院議員が、労働党の女性党員で女性調査団とともに北朝鮮を訪問してきたモニカ・フェルトンを大逆罪で告訴すべきだと主張している。イギリスの法律では、大逆罪の唯一の刑は絞首刑である。この主張は真剣に検討されることになるという。

この最後の部分は信じがたい。モニカ・フェルトンが絞首刑にされることはおそらくないだろう。しかし、絞首刑に向けた理論的な論証が提唱されるだろうことは大いにありうることだ。なぜなら、反逆行為に関するイギリスの法律は 1351 年に遡るといわれているが、そこでは、反逆者とは「王国内にいる国王陛下の敵の味方であり、王国内であれどこであれ敵を支援している者たち」と述べられているからである。フェルトン夫人はまた、ある意味でイギリスが目下ほとんどの国連加盟国とともに戦っている北朝鮮の共産主義者を支持・支援しているモスクワのラジオで自分の北朝鮮への旅について語っている。

しかし、もし反論が法律の分野に持ち出されるならば、北朝鮮はイギリスによっても国連の活動に参加しているどの国によっても国家として認められておらず、イギリスと戦争を行っているわけでもない。

他方、攻撃に対する国際正義を主張するために、北朝鮮に対する十字軍が続いているが、それは世界平和を脅かしてきたし、今も脅かし続けている。
それはともかく、フェルトン夫人を絞首刑にしようというような考えはまったく不条理であり、そのような主張は取り下げられることになるだろうと指摘するだけで十分であろう。

しかし、モニカ・フェルトンが北朝鮮に関するコメントのためにイギリスの小さな町スティーブニッジの都市計画委員会の委員長職を解雇されたという事実はどうなるのか？ フェルトン夫人と共にこの旅をおこない、今日その旅の印象を描いた最初の記事を『インフォメーション』に掲載している編集者ケイト・フレロンは、この解雇は西側の自由のすべての防衛線を掘り崩し、全体主義の共産主義国とは対照的なこの自由を高めるすべての可能性を傷つけるものだと考えている。彼女は、この解雇に続いて、西側世界で他にも同じようなことが起こるならば、民主主義と全体主義独裁にはもはや何の違いもないと信じているようにさ

え思える。

ケイト・フレロンの主張はおおげさすぎると思われるかもしれない。というのも、単純に言って、モニカ・フェルトンは実際に旅に出かけ、見てきたことを世界に発表することができたが、共産主義国では同じようなことはできなかったであろうからである。またさらに、私たちが生きる社会の基本的要素に反対する人は、その社会のための政治的職務に就くことができると期待すべきではないからだともいえるかもしれない。

しかし私たちは、怒りと残念さ、あるいはその双方の欠如をはっきりとさせるためにこう書くのだが、人々はフェルトン夫人の運命の帰趨に関係した動員をおこなうことができる。民主主義国は、それが独裁国で用いられているのと同様の手法を原則的に受け入れないと主張し続けるならばより強いものになる。そうした手法がますます使われ、それがしばしば起こり、民主主義により多くの汚点がつくならば、それは私たちが戦い追い出そうとしている制度にますますよく似たものになる。

したがって、ケイト・フレロンが私たちの自由あるいはその欠如と東側諸国における自由の欠如を同一のものとして特徴づけていることは、ほとんど信じられないほどバランスを欠くものである。彼女や彼女と意見を同じくする人々のように、民主主義への奇妙にもナイーブで絶対的な要求をもっている人々もいるようだ。もしそれが汚点をもっていればーそしてもちろんそれには汚点もあるのだがー、それはそれ自身を自由な民主主義と呼ぶ権利を失い、それはすぐに完全に暗黒と同一視されてしまうのだ。

Rapport fra Nord Korea: Korea er brændt - hus for hus :

北朝鮮からのレポート：朝鮮が焼き尽くされている

『自由デンマーク』(10巻4号) 1951年7月
Frit Danmark, Årg. 10, nr. 4, juli 1951.pp.9-16.

ケイト・フレロン 著
レアケ・シュタイマン／池田高巌 訳

これまで私は記事や発表で朝鮮滞在中に私自身が見聞きしたことだけを描いてきたが、この記事では『自由デンマーク』の読者に、朝鮮の異なる場所への三日間の旅の後で共通の集合場所ー平壌郊外のある小さな村ーに戻ってきたときに調査団の他のメンバーが報告したことを短く要約して紹介したい。

『自由デンマーク』8月号での安岳その他の場所からのレポートの引用で、朝鮮についての話は終わる。そのレポートはイギリス人の調査団メンバー、モニカ・フェルトン夫人の参加を得て完成された。

調査団とその構成についていくらかの説明をしておこう。調査団は国際民主女性連盟によって募集された。私たちは朝鮮民主女性同盟議長の許貞淑および朴正愛が代表する北朝鮮政府から招待された。許貞淑は約10年間にわたって日本に対するパルチザン戦争に参加した。朴正愛は12年間、日本人がつくった収容所に入れられていた。

調査団はカナダ、キューバ、アルゼンチン、アルジェリア、チュニジア、イギリス、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス、イタリア、東西ドイツ、オーストリア、チェコスロバキア、ロシア、ベトナム、中国の18か国を代表していた。中国からは3人が調査団に参加したが、それはデンマークを除いて複数名の代表が参加した唯一の国だった。

調査団の個々のメンバーは、その描写に多くを費やそうとは思わないが、端的にいって、自分の責任を自覚する女性たちだった。そのうちの幾人かは戦争とレジスタンス運動の経験があり、ごくわずかのメンバーを除いてそのほとんどは研究者だった。

調査団（通訳と写真家を含め総勢27人）は朝鮮に到着すると、まず第1日目を鴨緑江のそばの新義州という都市で過ごし、夕方に平壌近郊まで200キロ以上の長距離をジープで移動した。私たちは皆、まだ戦争の被害を受けていない小さな村ーこの村は主要な道路から遠く離れた所にあり、木々に覆われていたので空から探査されていなかったーで宿泊した。平壌に滞在している間に私たちは3グループに分かれた。さらに、4つのワーキング・グループに分かれて南部、東部、北部とそれぞれ異なる場所に向かうことになった。

私たちはその後再び村に集まり、ともに故国に戻った。私たちは5月16日から17日にかけての夜に朝鮮に到着し、12日間の滞在の後、5月28日から29日にかけての夜に朝鮮を離れた。

訪問したすべての都市で、私たちは同じものー廃墟と人々の悲惨ーを目撃し、同じことーあまりにも悲劇的な話と人間の粗野さーを聞いた。そしてどこでも、私たちは同じことー信じがたい絶え間ない戦争の恐怖ーを経験した。

今朝あなたの家が爆撃され、母親が焼け死んだとする。しかし、それだけではまだあなたが損失と悲しみによってこの戦争に犠牲を捧げたことを意味しない。戦争はさらなるものを欲する。1時間もしないうちに、かれらはあなたの子どもたちが遊んでいる廃墟を爆撃するかもしれない…。あるいは井戸で水を汲もうとしていたあなたの父親にマシンガンの銃弾が撃ち込まれるだろう。

平和が訪れるまでは、それでも十分ではない。それはすぐに起こるだろう。

イーダ・バクマンと私がアルジェリア、チュニジア、フランス、ベトナムからの調査団メンバーとともに訪れた黄海に面する南浦からのレポートで、私が朝鮮で経験したことを報告したい。

南浦の恐怖

南浦は人々への災厄が私たちに最も強烈な衝撃を与えた都市だった。戦争前、この都市には6万人の市民がいた。南浦は1950年10月22日から12月5日までアメリカ軍に占領された。平安南道の地方政府の委員長ソク・チャンナム（石昌男）がその数を私たちに教えた。占領期間中、占領軍は1,511人の人々を殺した。その半数以上は女性と子どもたちだった。

南浦は新義州や平壌と似ていたーつまり**廃墟と化していた**ーが、平壌のように系統的に破壊されたわけではなかった。12月5日に撤退したとき、占領軍はいくつかの建物を燃やし、

そこにあった食糧を破棄するか持ち去っただけだった。

南浦は爆撃の標的にされてきたが、もっともひどい爆撃は**今年の5月6日のもので、イーダ・バクマンと私がこの都市を訪問したのは、それからまだ3週間も経っていないときだった。**

南浦で私たちが経験したのは恐怖の一日だった。人々は最後の爆撃からの興奮がまだ冷めやらないでいた。私たちが行き、立ち止まった場所では、一群の人々が私たちについてきた。人々は私たちの近くに集まり、彼らに起こった不幸ー親しい者を失ったことや家が破壊されたことーを私たちに語った。

ほこりと死体の臭いを通して

いたるところに廃墟、貧困、悲しみがあったが、とりわけ永洞里とよばれる町の一角は、不幸の頂点に達していたように思われた。この地区は坂の途中にあり（むしろ「あった」といったほうがよい）、3週間前には花咲いていたアカシアの木々が今では煙突とともに黒焦げになって光っており、それが灰と瓦礫の上にある唯一のものだった。

「この丘は墓地に変わってしまった」と生存者の一人が言った。「ここで暮らしていたすべての家族はそれぞれ3〜4人、多い場合は10人の家族を失った」。

わたしたちはこれまでは抑制を解き放った激しい怒りに出会わなかった。朝鮮人は通常、その不幸を抑制された態度で表現する。しかし、ここでは違っていた。両腕がない、ぼろを着た、汚れた男性が私たちの前に立って話したことを私たちは誰も決して忘れないだろう。彼の声は最初は小さかったが、次第に大きくなり、復讐の叫びと変わっていった。

家を失った、ぼろを着た子どもたちをもつ母親、そして子どもを失った母親がいた。3週間足らず前までは一緒に暮らしていた家族を失った孤児たち、年配の女性たちや男性たちがいた。

その日はとても暑い日で、廃墟の下の死体からのぼる吐き気を催させるような臭いが町中に漂い、ワゴンが通るとほこりが爆撃された道路に厚い雲のように吹き上げられていた。私たちがそこにいるあいだに二度、瓦礫の山が崩れるようなドーンという音がした。子どもたちがそれに登っていて、一緒に崩れ落ちたのだった。あまりにも危険な場所だった。

ある人は、朝鮮には一定数の重要な軍需産業があり、1950年8月31日に6時間にわたって徹底的に爆撃された南浦の大規模な肥料工場も軍需製造施設に転用が可能だった、と思うかもしれない。300人の労働者が死んだのはひどいことだが、この爆撃や他の疑わしい工場への爆撃には反対しがたい、と言う人もいるかもしれない。しかし、**軍事的標的が破壊された後もアメリカ軍の空爆は終わっていない**ーこの町が瓦礫の山となり、人々がわずかなぼろ着をまとい壕や洞窟の中で暮らすようになった時点でもーという事実と折り合いをつけることは難しい。

南浦で私たちが宿泊した場所は市庁舎がかつてあった丘の洞窟だった。調査団メンバーのうちの2人はひどい病気だったが、とにかく旅に同行した。彼女たちはにんにくの臭いがする小さな部屋で椅子に座って快適でない日を送らなければならなかった。しかし、外の日光とほこりと破壊された町の臭いの中にいることのほうが一層ひどいことだった。

しかしここで、私たちがやってきて滞在するのに苦労した他のすべての場所と同じように、**私たちが**数日間でこの地獄から抜け出すことができたことに感謝しなければならない。しか

し、朝鮮人はそこで暮らさなければならないのだ。

翌日、私たちは信川面の集団墓地を訪問した。アメリカ軍**第24歩兵連隊**が10月20日から12月7日までこの地方を占領していた。

死の谷の集団墓地のそばで

この日の私たちの経験は、悲しい塚、埋葬塚に囲まれたある山の中腹で始まった。山腹を取り囲む集団墓地の遺体のなかで身元の分かっているものはほとんどない。

どのような人々が処刑され、これらの墓地に投げ捨てられたのか？ 疑いをかけられた人々だ。しかし、誰が疑われたのか？ 私たちのまわりには多くの人々、近くの村の住民で、この墓地に埋められた人々の近親者たちがいた。調査団はかれらの話や名前を記録した。

その記録から逮捕がどのような手続きをとって行われたのかが分かる。アメリカ軍は連行してきた人々をレジスタンス運動のメンバーだと非難した。親戚が朝鮮人民軍に属しているだけでそのようにみなされた。次いで、アメリカ軍は彼らが農民組合、女性団体、協同組合など、ソ連による朝鮮占領の時期に設立されたか、それらを引き継いだ朝鮮政府が設立した団体のメンバーだと強く疑った。人々がそのような団体に属していなかったとしても、容疑者を逮捕するまで人質として拘束した。私たちは重ねて、逃げてきたこれらの人々や墓の中に一人あるいは何人かの近親者を発見した人々に話を聞いた。彼らの中には自分で墓を掘り返した人もいた。

卓伏同という44歳の女性は、頭を膝につっこんで、手は背中で縛られたまま座っている兄弟の遺体を発見した、と私たちに語った。

金基順という58歳の農夫は、息子夫妻とその子どもたちが生き埋めにされた、と語った。彼自身は息子たちが埋められたのと同じ地区に隠れており、地元の人々に助けられた。地元の人々はアメリカ軍に集団墓地を掘らされていた。金基順は息子たちを見つけたが、彼らはすでに死んでいた。

私たちが訪れた集団墓地は泰昌墓という山にあった。長さは80メートルで、死体は二段に積み重ねられていた。山のいたるところに同じような墓地があると私たちは教えられた。それはまさに死の光景だった。身元が確認されたのはわずか数人の遺体だけだった。その遺体は谷の向こう側に移され、塚の下に埋葬された。

遺体と血まみれの衣服

これらの墓地に埋められたのがアメリカ人なのか、それとも朝鮮人なのか、私たちははっきりとは分からなかった。そこで、人々はいくつかの遺体の覆いをとって私たちに見せた。それは疑いなく朝鮮人だった。私たちは後ろ手に縛られた遺体、砕けた頭蓋骨、血まみれの衣服、靴、縄切れを見た。少し離れたところに別の埋葬塚があり、そこには20人の子どもの遺体が埋められている。私たちは子どもたちの遺体を見なかった。

これらの集団墓地、そして北朝鮮のいたるところにあるすべての集団墓地に埋められているのは、北朝鮮人に殺された南朝鮮人かもしれない！ それならば、耐えがたい腐臭がする墓地のそばで私たちと並んで立っている途方に暮れた人々は、南朝鮮からやってきた犠牲者の家族でなければならない。夕方に村の郊外の畑で私たちのまわりに腰を下ろしていた人々も同じことになる。そこでは茫然としている人もいれば、泣き叫ぶ人もいた。かれらに何度も

何度も自分たちが経験したことを尋ねなければならないことは気まずいことだった。以前に李承晩の兵士がいなかったかどうか尋ねたときはいつもーこれは調査団の他のグループが活動していた朝鮮の他の場所でもそうだったがー私たちは繰り返し同じ答えを受け取った。「この辺りにはアメリカ軍以外はいなかった」。

私たちはこの地区の委員会の委員長から死者の数と殺害方法を教えられた。1,561 人が殺され、そのうち 1,384 人が銃殺され（男性 932 人、女性 452 人）、57 人が絞殺され（男性 42 人、女性 15 人）、50 人が生き埋めにされ（男性 30 人、女性 20 人）、35 人が殴り殺され（男性 25 人、女性 10 人）、35 人が焼き殺された（男性 32 人、女性 3 人）。男性と女性というのは正確でない。殺された男女のなかには 8 歳以下の子どもが 354 人いた。

これは真実ではない、国連軍の兵士はこのような振る舞いをしない、といわれている。私もそうであることを願っている。満足のいく調査委員会が、朝鮮で私たちが示された証言記録が偽りかどうかを判断しなければならない。

写真：
＜上段左＞ 新義州の残骸を眺める女性調査団
＜中段左＞ 絶望を抑えきれない老女
＜下段左＞ 安岳の集団墓地からーこれらの男性たちは生き埋めにされた
＜中段右＞ 典型的な朝鮮の都市の写真
＜上段右＞ 祖母と一人だけ生き残った彼女の孫
＜中段右＞ 平壌の委員会のメンバー
＜下段左＞ 安岳の墓地のそばに立つ委員たち
＜中段左＞ 平壌の街頭で

写真：調査団は平壌郊外のある村で会合をもった。そこが私たちの本部となった。
机を前に座っているのは左から、ベルギー人のアンネヴァル博士、イーダ・バクマン、
団長のロッド夫人、朝鮮民主女性同盟委員長の朴正愛、イギリス人のモニカ・フェルトン、フランス人のジレット・ジーグレル。

東部と北部への旅

以下の内容については、前述の記事と同じようには責任をもてない。しかし、それを私に語ってくれた女性たちとそのレポートを信頼している。悲しいことに、その内容は私自身が経験したことと極めてよく似ていた。

5 月 22 日から 24 日にかけて、調査団のあるグループが江原道文川郡の万先村（平壌から 150 キロ）と元山という都市を訪問した。旅の参加者はベルギー人の生物学博士のジエルメ・アンネヴァツ、チェコスロバキア人で調査団の書記のミルセ・スヴァトソヴァ、中国人で調査団の副団長、北京の女子大の学長で中国民主同盟の代表である劉清揚、そして 4 人目のメンバーはイタリアの国会議員エリザベータ・ガロであった。

このグループはーすべてのメンバーがレポートに署名しているがー平壌、江東、山東を通過した黄海から日本海までの朝鮮を横断するジープでの夜間移動の間に、農民たちが夜に畑を耕しているのを目撃したという。農民たちにとってそれが飛行機からの機銃攻撃からの絶え間ない恐怖なしに長時間働くことができる唯一の時間帯だからであった。

万先の近くで、調査団のメンバーたちは広い山林地帯が焼けてしまっていることに気づいた。それは焼夷弾の投下によるものだった。焼夷弾は容器を可燃物で満たした爆弾で、木々や作物をだめにしてしまう。

万先は1950年10月14日から12月5日までアメリカ軍に占領された。アメリカ軍と朝鮮人民軍との交戦が何回かあったが、アメリカ軍は3日間戦った後、村に侵入してきた。しかし、かれらは数か月間、たえず追い散らした敵軍に包囲されていたのでより強力な手段をとったのだろう。アメリカ軍はこの辺りの自軍の陣地から撤退する前、すべての村々を焼き払い、安全に逃げ延びることができなかった住民たちを万先に追い立てた。数日後にかれらは幾人かの女性を釈放したが、彼女たちはすばやく山に逃げるか、廃墟に隠れることができた。約500人の男女が捕まえられ、54人が殺され、76人が元山に送られたが、誰もかれらをふたたび見ることはなかった。

アメリカ軍が撤退した直後に、この村は焼夷弾で爆撃された。

女性はレイプされ、子どもたちは飢えで泣き叫ぶ

このグループは自分や自分の近親者が被害を受けたこの地方の多くの住民たちについて語った。高里の27歳のある女性は、夫が郵便局に勤め、彼女自身は小さな家の面倒を見つつわずかばかりの田畑を耕していたが、夫と2人の子どもたちとともに逮捕された。下の子どもは1歳になったばかりだった。彼らは殴られ、「アカの家族」だと責められた。彼女は夫と別々にされ、その後夫と会っていない。アメリカ軍は彼女と彼女の子どもたちを元山の監獄に送った。彼女はほんのわずかな食事しか与えられなかったので、子どもに乳をやれなくなった。兵士たちが監獄のなかから少女を選び出し、レイプしたと彼女は語った。彼女は20日間投獄された後、朝鮮人民軍の手によって解放された。

（女性たちが語った自分たちの夫が受けた被害など、この地区では多くの目撃記録がある。しかし私は自分自身が犠牲となった女性たちが語ったことを引用することにする。私たちが接触した証言者たちは前もって選ばれていたのか、それとも自分たち自身で選ぶことができたのか、と私はよく尋ねられた。私たちがどこかの場所に到着したとき、とても多くの人々が私たちのまわりに集まるということがよくあった。そのため私たちは私たちに話す人の数を制限しなければならなかった。そうしなければ私たちはいまも朝鮮にいたことだろう。村々の壕や洞窟から自由に移動できたならば、自分たちが話したいと思う人を選ぶことができただろう。

女性と子どもたちが皆殺しにされる

元山は先述の通り日本海の近くにあり、北江原道の最大の都市である。労働党の北江原道委員長である崔光烈は私たちに次のように説明してくれた。戦前、元山には12万3,127人の市民がいたが、今では5万7,000人だけが残っている。何とか人が住める家は3分の1だけになった。元山には精油所と造船所があったが1950年8月に破壊され、10月14日から

12月9日まで占領された。その後、3月31日まで元山は膨大な数の空爆と海からの砲撃にさらされた。軍艦からの砲撃で518人が負傷し、498人が殺された。そのうち241人は子どもであった。

調査団のメンバーが元山にいるあいだにも海からの砲撃があり、それは5月23日から24日にかけての夜に激しくなった。その夜、11人の市民が殺され、3人が軽傷を負った。

悲しい数字を示すことになるが、江原道での女性とこどもの戦争犠牲者の数は4月1日までに女性2,298人、子ども2,292人にのぼっている。676人の子どもが孤児となった。

証言を聞いたなかに全権花という49歳のプロテスタントの宣教師がいた。彼女の義理の娘で25歳の尹順子は深夜に起こされ、2人の娼婦とともにワゴンに連れ込まれた。彼女は稲田に逃げ込もうとしたが捕らえられ、レイプされ、銃殺された。全権花の兄弟の全忠寛とその妻は、それぞれ12月29日と12月24日に元山の街頭で機銃掃射で殺された。全権花はこの夫婦の6人の子どもを育てなくてはならなくなった。

38歳の農婦、李錦順は女性団体のメンバーで、元山の世洞里に住んでいたが、10月25日に1歳の子どもと一緒に捕まった。彼女は元山郊外の葛麻里の監獄に投獄された。彼女は毎晩尋問され、背中や腹を殴られた。彼女は11月10日に釈放された。その5日後に彼女の子どもは死んだ。彼女が釈放されてから10日後の11月20日、彼女の夫が捕まった。7日間の激しい拷問の後、彼は安辺郡世源面の春田に連れて行かれた。釈放後、李錦順は春田で他の38人の遺体とともに夫の遺体を発見した。

人間も家畜も追い払われる

ドイツ民主共和国のヒルデ・ハーン、西ドイツのリリー・ヴェヒター、作家でジャーナリストの中国人パイ・ラン、オランダ人弁護士のトレース・ヘイリゲルスからなるグループは朝鮮の北部を訪れた。

彼女たちの行程は平壌から介川へと向かい、それから熙川、江界、満浦へ行き、平壌に戻ってくるというものだった。

旅行中、調査団は少なくとも6つの山火事を見た。そのうち2つは彼女たちの目の前で燃え出した－ひとつは平壌から介川に行く途中で、もうひとつは熙川から介川に行く途中で発生した。どちらの場合も、彼女たちは飛行機の音を聞き、それに続いて地面から火柱が立つのを見た。その後に火が燃え広がり、木々に燃え移った。

介川面は介川の町と5つの村からなっている。1950年10月21日、介川はイギリス軍、カナダ軍、オーストラリア軍、トルコ軍および数百人の李承晩軍の支援を受けた米陸軍第26・第27装甲師団に占領された。占領は40日間続いた。

介川面には1万3,000軒の家があったが、その半数以上は破壊されていた。占領軍が退却する際に真っ先に火を放ったのだった。また、この地域の家畜の数も劇的に減少していた。戦前には7,600頭の牛がいたが今も残っているのは2,200頭であり、7,800頭いた豚は300頭に、鶏は10万羽から1,000羽に減ってしまった。

この地域には8万人以上の住民がおり、その8割は農民だったが、今では6万人になった。アメリカ軍は銃殺、焼き殺し、**殴り殺し**によって1,342人を殺したという。この調査団グループがこの地域の委員長であるキム・ビョンホ（金炳午）に、これらの犯罪は**アメリカ軍**がやったというのは確かなことかと尋ねると、彼はアメリカ軍がやったことに間違いなく、他

の軍隊はそれに関わっていないと答えた。

母親は拷問され、息子は銃殺される

調査団グループは介川の馬場里2番地に住む李真賢という女性に話を聞いた。彼女は調査団のメンバーに、妹は農民として政府から勲章を受け、この地域の女性団体で役員をしていたが、アメリカ軍に殺された、と語った。占領軍が近づいてきたとき、李真賢は一緒に逃げようと妹を説得しようとした。しかし、妹は自分の任務からそれはできないと思い、できるかぎり早く追いかけていくと約束した。

李真賢は妹の子どもたちを連れて自分だけが逃げた。しかし、妹が追ってこないので妹の8歳の息子とともに戻り、妹に何が起こったかを発見することになった。李真賢は、裸にされ木にくくりつけられている妹を見つけた。兵士たちは妹を殴りつけながら、夫の居場所や彼女の団体について尋問していた。彼女が答えようとしなかったので、電気ショックによる拷問がおこなわれた。この若い女性は数日間拷問され、この町の住民たちはそれを強制的に見せられた。彼女の8歳の息子は兵士たちの前に飛び出して行き、そして銃殺された。その母親も最後には殺された。

李真賢も捕らえられたが、妹との関係を隠し、なんとか生きながらえた。

介川では女性と子どもの群衆が調査団のメンバーのまわりにやってきて、口々に自分たちの悲劇を聞いてほしいと訴えた。車有淑という老女は、アメリカ軍が自分の家にやってきたとき、人民軍に参加して負傷して家に戻ってきていた息子が…と語った。呉仁粉はキム・ユンジュという彼女の20歳の娘が数人の兵士にレイプされ、溺死させられたと語った。

李順実という名前の若い女性は、兵士たちに捕らえられ、12日間裸のままにされた。

破壊された町ー爆撃は続く

このグループは、慈江道にある江界を訪れた。慈江道は朝鮮の最北の道で、人口もわずかでそのほとんどは農民である。敵軍はこの道を占領しなかった。この道の**人民委員会**の委員長である李珠善は、地方政府はあらゆる手を尽くして難民の救助に努めているが、かれらに食料と避難場所をあてがうことは大きな問題である、と説明した。難民が北に逃げると、アメリカ軍の飛行機が彼らを銃撃する。アメリカ軍は畑の牛や道で荷を運んでいる家畜も銃撃する。江界には4万人の住民がいたが、何度も爆撃されている。この道の山岳地帯の村々で焼かれたり爆撃されたりしていない村はない。江界での最大の爆撃は12月12日に起こり、それによって町はほとんど完全に破壊されてしまった。アメリカ軍は主に焼夷弾を落とし、続いて時限爆弾を投下した。時限爆弾は落とされてから20日までのあいだ、さまざまな時間に爆発した。2月初め、すでに破壊されたこの町に新たに激しい爆撃が加えられた。このときは主に時限爆弾が投下されたので、町を逃げ出した住民たちはその後20日間町に戻ろうとしなかった。

この調査団グループは、この一帯の唯一の軍事目標は鉄道と駅であり、それはすでに10月9日に破壊されていたと述べている。中国と朝鮮の国境にある満浦では、町の人民委員会の委員長が、この町には1万2,500人の住民がいたが、11月12日の爆撃でひどく破壊されてしまった、と語った。しかし、この町は12月7日に再び爆撃され、あえて廃墟のなかで暮らしていた人々が350人以上も殺された。

このグループはレポートのなかで、暗い地下室の片隅で子どもたちが3人だけで暮らしていたと書いている。最も小さい子どもは2歳で、最年長の少年は13歳だった。この子どもたちの親は12月7日の爆撃で死んだのだという…。

På rejse i den anderen verden. Nogle indtryk fra Tjekkoslovakie.

別の世界への旅　ーチェコスロバキアの印象

Frit Danmark, Årg.10, nr.6(1951).S.12-16:ill
『自由デンマーク』(10巻6号) 1951年9月、12-16頁

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高嶽　訳

国際民主女性連盟が極東に向けて送った調査団の旅の主要な焦点はもちろん朝鮮だが、1万 7,000 キロの長旅の途中で、私たちは現在の西欧ではほとんど出会う機会がない環境や人々とも接した。

この記事や今後の記事で私が描こうとするのはいわゆる鉄のカーテンの東側への旅だが、それは時と環境に狭く規定され、強く制限された個人的な見聞であって、それ以上に理解されるべきではない。諸問題の原因を探るようなことは、多くの理由で不可能だった。世界の東側を旅する調査団のメンバーは、まるで叔父や叔母に手厚く保護されたパリの 17 歳の少女のようであった。身体と心を包む柔らかいコートのように手厚いもてなしを受けたが、そのコートが時には暖かすぎ重すぎるように感じることがあるということは何も秘密のことではない。

あぁ、こう書いている今も、もしチェコスロバキア、ロシア、シベリア、中国で私たちを受け入れてくれた人たちが、私が今ここに書いていることを読んだなら、どんなに困惑し、そしておそらくどんなに傷つくだろうかと思わずにはいられない。かれらは惜しみなく心から私たちをもてなしてくれたし、おそらくかれらの多くは自分たちの努力に深刻な欠点があったとは考えられないだろう。しかし、独りになりたい、独りで経験したいという私たち西側の人間の欲求はかれらがゲストに対する義務だと感じていることとはまったく正反対のもので、かれらが**理解できない**ほどのものなのだ。

これが東側諸国への旅をとりまく環境だが、しかしそのことは行く先々の様子を自分で見たり感じたりすることがまったくできないということを意味するわけではない。私は自分の記事のなかにチェコスロバキアやロシアや中国についてのすべての真実が書かれていると主張するものではない。それはよくいわれるように「雰囲気を通して経験された」**別の世界**の断片的な印象にすぎない。

東側諸国を旅する共産主義者ではない西欧人の心理状態は、その環境についての判断をき

わめて不安定なものに、積極的な方向と否定的な方向の両極端に揺れ動くものにする。この心の揺れ動きを背景に、経験したことはたやすくその自然なバランスを崩してしまう。ただそれが自分の国とまったく**変わるところがない**ということだけで、あまりに妥当で普通な場面で立ち止まり、いぶかることになる。それはとても滑稽なことだ。その一方で、単に東側諸国では何か危険なことが起って当然だという事実に事前から備えてきたというだけで、奇妙で恐怖をあおられるような環境を受け入れてしまうのだ。好むと好まざるとにかかわらず、鉄のカーテンを通り抜けると、物事をなりゆきで判断しているのだ。

写真：ハイタトラのグランドホテル－チェコスロバキアの労働者が休暇を過ごす豪奢なホテルのひとつ

クレメンティス、犯罪者

極東への旅の途中で私たちが最初に降り立ったのはプラハで、そこで私たちはアルクロン・ホテルに宿泊した。後日、私は『ポリティケン』（デンマークの新聞）の一面でチェコの治安警察はアルクロンのすべての部屋に盗聴器を設置しているというUP電の記事を読んだ。この情報は「ウィーンの信頼できるチェコ情報筋」によるものだという。

もし盗聴器がプラハの私たちの部屋でなされた、いらいらした批判的な意見を記録していたとしたら、あぁ、私たちはなんと危険なことをしていたことだろう。私たちのうちの何人かは－少なくとも私自身は－壁の中にマイクが仕掛けられているとは疑いもせず、デンマーク語や英語で大声でプラハにいることの不快さを言い募っていたのだ。

なぜ不快だったのか？ このときは大規模な粛清の時期であり、街の緊迫した雰囲気から私自身も逃れられなかったからだ。この街では水面下で恐ろしいことが起こっていたが、味気ない堅苦しい文章以外にはどんな情報も得ることはできないでいた。クレメンティスはどこに？ 彼はどこにいるべきか？ しかし、国民に崇拝されていた人物の一人、民主プラハの政府公舎に掲げられた横断幕から慈父のような目で大衆を見下ろしていた男が一夜にして**犯罪者**に変わってしまうというようなことは奇妙であり、理解しがたいことではないのか？ まったくそうではないのだ。誰もが革命には西欧資本主義やアメリカ帝国主義に協力する多くの敵がいることを知っており、裏切り者が暴露されたことに感謝すべきなのだった。しかし、ゴットワルトが同じ運命を辿らないとは誰も保証できない。われらがゴットワルトよ！ しかし、彼を見てみれば、彼は善人－常にこの社会の弱点に寄り添う善人なのだ…。

敵はアメリカやイギリスだったのか？

私たちを受け入れてくれたのはチェコスロバキア女性民主協会で、上品さと配慮をもって毎日私たちをもてなしてくれた女性たちは高い教育を受け、知的水準も相当高かった。しかしある日、私は自分が最も共感したことを知らせる必要があると感じた。私は無防備なチェコスロバキアの都市に対するアメリカ軍の無慈悲な爆撃や、イギリスに避難場所を求める貧しいチェコスロバキアの逃亡者に対するイギリスの振る舞いの数々を教えられた。それではまるで戦争中のあなた方の敵はドイツじゃなくて、アメリカやイギリスであるかのようだわ、

と私は言った。

この西側への憎悪ーそれが「自然な」ものか宣伝によって造りだされたものかは実際には分からないがーは東欧ではどこでも見られるものだが、それはここでも平和のプロパガンダとは調和していなかった。この平和のプロパガンダはチェコスロバキアでは極めて激しく行われている。スターリンとゴットワルトと平和のために、あるいは、平和とスターリンとゴットワルトのために捧げられた乾杯とスピーチで息もつけないほどだ。大きなポスター、飛び立つ鳩、横断幕でめまいがする。5月1日前後には、誰もが**「平和のために」**あらゆることをしていた。私は車での移動中、道の向こうからやってきた若者たちと会ったときのことを決して忘れないだろう。「何のために走っているのですか？」と私が尋ねると、チェコ人の小柄な通訳は嬉しそうにこう答えた。「平和のためです。チェコスロバキアのいたるところで人々が平和のために自発的にジョギングしている姿を見ることができますよ」。

彼はこの平和のための努力を見てとても誇らしげな顔つきをしていたので、私たちはこの**「自発的な」**ジョギングについて何か言うことを静かに自制した。

写真：カルルスブルンで休暇を楽しむ鉱夫

メーデーのデモは公的祝賀行事

5月1日のデモンストレーションは毎年ごとに特別テーマが設定され、今年のテーマは**「平和」**だった。メーデーの性格はこのような考えを裏切るものだっただろうか？ いや、そうではなかった。東側諸国でのメーデーのデモンストレーションは戦闘的な調子のものではなく、公的な祝賀行事であり、政治的プロパガンダは一少なくともプラハの場合は一行進が続くにつれて徐々に祝祭の性格を帯びるようになる。（軍事パレードは軍の休暇のときに行われる。）

ゴットワルトの朝鮮についての演説で集会が始まったが、私が見たところでは誰もその話を聞いていなかった。もっとも、「アメリカの占領軍と戦っている朝鮮人民への熱い連帯のメッセージ」が終わると、莫大な拍手が巻き起こったけれども。

その後、社会主義世界の巨人たちー存命の者も亡くなった者もーを描いた大きな横断幕を先頭にデモ行進が始まった。スターリン、マルクス、ラ・パッショナリア、マティス、金日成、毛沢東、そしてシロキーと並ぶクレメンティスの後継者ゴットワルトの姿が描かれている。兵士や色鮮やかなラインが入ったカーキ色の軍服を着た軍幹部たちが子どもたちを肩に乗せ、手に花をもって行進している。しばらくすると、行進は民族衣装を着た若者たちによる踊りに変わり、横断幕はグロテスクな張りぼての人形にかわる。人形は自由の女神の手で押しつぶされている子どものトルーマンや木馬に乗ったマッカーサーなどかれらが嫌う人物たちの姿をしている。しかし、このプロパガンダには暗さはなく、生活様式の一部になっている。

このメーデーの昼間の数時間、新しい民主政府によってチェコスロバキアの幸福と可能性を示すためにあらゆることがおこなわれ、ほとんどすべての人々はいつもは美しいプラハを悲しい街にしているあの陰気な集団のことを忘れていた。プラハの人々が貧困やその他の理

由でとても悲しげに見えるとすれば－かれらが以前よりも陰気になったのか、それとも現在は以前よりも陰気でなくなったのかは私には比較する根拠がないので何ともいえないが－、私がそのような想像をしてしまうのはおそらくベネシュやマサリクの運命に関する私の知識のせいであろう。

人々の物質的生活水準を適切に描き出すことは難しい。というのも、人民共和国やソ連邦ではお金の影響をいくぶん架空のものにしてしまう制度がとられているからだ。食糧や衣服といった生活必需品は配給制になっていて適切な価格で購入することができるが、追加で買おうとすればどれも高い値段がする。私は配給の規模についてどうしても満足のいく理解ができなかった。私が得た答えにはとまどいや矛盾が多く、すでに月の初めには配給されたものをすべて使ってしまったという若い学生の世帯の発言から、配給量は非常に制限されているのではないかという印象を受けた。

この国で最良の衣服をドルで－ドルだけで－買うことができるダラックスという店を訪れたとき、その質や意匠は－私たちの国の郊外にある普通の店と比べてみても－貧弱だという印象をもった。しかし、その価格は－デンマーク・クラウンに換算してみて－法外に高かった。

心からの願い：早く民主主義を手にされることを

私たちはプラハを発ち、車でタトラ山に向かった。初日の午後、私たちはかつてバタという名で製靴で有名だった街で、現在は人民民主主義共和国の工業都市であるゴットワルドフに着いた。その外観は想像していた通りのもので、殺風景で機能主義的であり、生産と労働者の必要をみたすために設計された典型的な都市であった。この地方の民主女性団体を代表して3人の女性が私たちを歓迎してくれた。1人はトラクターの運転手で、もう1人は農業労働者（しかしトラクターの運転手になりたいと思っている）で、3人目はレコード工場の労働者だった。彼女たちは大きな百合の花束をもって背筋を伸ばして、何時間も私たちを待っていた。花束を私たちに手渡す前に、1人が微笑みながら短いあいさつをした。「何と言ったのですか？」と私たちは尋ねた。「彼女は、お会いできて嬉しいです、みなさんの国でも早く人民民主主義が実現することを心から期待しています…、と言ったのです」。

高い住宅水準

心に響くこうした善意の言葉とともに、私たちはゴットワルドフのクラブハウスに向かった。それは巨大なホテルのようで、これが労働者階級とその家族が余暇を過ごす場所なのかと思われた。公式の歓迎のあいさつはなかったが、私たちはダイニングルームで腰かけ、お茶を飲み、打ち解けた会話を聞いた。私たちの周りでたくさんの活動が行われているようだった。退出するとき私は偶然にホールにつながるドアを開けた。そこではビリヤード台が長い列をなし、若者たちが熱心にゲームをしていた。その隣の部屋ではアマチュアのオーケストラが練習をしていた。

旧バタでは労働者たちのための家族住宅が建てられていたが、現在ではその傾向が変わっている。私たちは建設中の建物を示された。イギリス人の調査団員モニカ・フェルトンは都市設計者で、イギリスの鉱山都市の建設に関わったことがあったが、さらにいくつかの建築物を見た後で、チェコスロバキアの空間と資材の水準は非常に高く、イギリスよりもうまく

造られていると語った。私たちが訪れた家にはセントラル・キッチンとランドリーがあり、借り手は１人につき食糧、ランドリー、光熱費を含む家賃を払う。家賃の額は世帯収入にもとづいており、収入の低い世帯は収入の多い世帯よりも家賃が安い。ゴットワルドフでは劇場や映画館の料金は一律で、街のすべての交通機関で使える１か月間のパスも安い値段で購入することができるそうだ。

遅くなったので、視察できるはずだった工場はすでに閉まっていた。もしそれらの工場が軍需生産に変わっていたら？ 私には**分からない**。私たちはそれは製靴工場だと教えられた。

写真：プラハでのメーデーのデモの写真から

姿を変えた温泉

私たちはゴットワルドフにもっと長く滞在したかった。それは新しい社会との出会いを象徴していた。ここではその新しさは文化的純粋性のなかに現れているように思われた。しかし、元々の計画になかったので、それができるとは思えなかった。そこで私たちは温泉に移動した。私たちは夕方に到着し、レストランの女性たちの歓迎を受けた。私たちが唯一の客で、彼女たちが出した食事はここがかつてヨーロッパの有名な国際的保養地のひとつとして名高い場所であったことを思い出させた。夜に街を歩いたが、旧式のホテルや不恰好な邸宅、ひどい音楽館、よく整備された公園のなかの奇妙な格好の井戸など、他の温泉地と区別がつかないほどよく似ていた。

私は豪華なベッドで眠りに就いた。それは、かつては退位させられた公爵や冒険好きな公爵夫人が夜の退屈なバカラの後で休息するために横たわったベッドだった。

しかし翌朝、見事な芝生を見渡すと、有名な、あるいは悪名高いリゾート客がいる気配はなかった。客層が変わったのだ。私が見たのは頭にスカーフを巻いた老女たちが杖を頼りに苦労して歩き、関節炎の治療に向かっているところだった。この温泉の主人が私たちを見送った。激しい雨の中、彼の大きな傘に入れてもらって車に向かって歩いているとき、彼は言った。「この温泉は少しばかり上品さを無くしましたが、今では本当に必要としている人たちだけがここに来るようになりました。ここは年中営業しています」。

私にとっては、この温泉、タトラ山のホテル・プラハ、そしてカルルスブルンという名のもうひとつの海辺の町への訪問が、社会主義に向かう社会へのこの短い訪問のなかで最も豊かなものとなった。労働者とその家族、その他の人々は、かかりつけの医師に山で余暇を楽しむことをアドバイスされ、ハイタトラの豪奢なホテルで休暇を過ごす。ここでも外見の上品さは失われてしまっているが、人々は夜にはカードに興じ、ブラウスやスカートで踊る。スーツは着古されたものだが、そこにいるのは本当に休暇を必要としている人々だけで、幸せそうに見える。労働者たちは所属する労働者団体を通してここに休暇に訪れる。私たちの通訳は、880 チェコ・クラウン（約 115 デンマーク・クローネ）を彼女の所属団体に支払っており、近い将来に保養地に行けることを楽しみにしている、と語った。旅費も支払った額のなかに含まれている。国家が送ることを決めれば－いや、部屋があれば－、これらの印象的なホテルに泊ることができるが、最良の季節であるこの時期にはめったにないことだが、

「民間人」は1日200クラウンでここに泊ることができる。

このような政治的変革の結果が相対的にたやすく得られるものだということは真実だ。具体的な状況の広さと深さについて多くを示す必要はない。人々は以前とは違って保養地を訪れ、豪奢なホテルに泊まっている。しかし、多かれ少なかれ社会の上層に属する人々だけが享受することができる喜びについて感じる暗い不快感から解放されるという経験ができたことは良かった。

Spredte indtryk fra en rejse i den anderen verden. II. Genfindelser og opdageiser i Moskva

別の世界への旅II　ーモスクワでの発見と再発見

『自由デンマーク』（10巻7号）1951年10月　5-8頁
Frit Danmark, Årg.10, nr.7(1951).S.5-8

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高嶽　訳

「ソビエト連邦ほど深くそして暖かく人々とたやすく接することができる場所はないだろう。

あなたはすばやくー時に必要なのは一目見ることだけだー友人をつくり、すぐに強い共感の絆で結ばれる。ソビエト連邦ではー他の場所とは違ってー人々は深い人間性の感覚と変わらぬ兄弟愛の波を楽しんでいる、というのが私の正直に思うところだ。本当の喜びー愛と愛情から私の胸は高まり、目には涙が浮かび上がる。

私がキャンプで会った子どもたちはよく育ち、よく世話されて、丁寧に扱われており、幸せそうだった。かれらの目は澄み、信頼と希望でいっぱいだった。私は仕事終わりの集会場で労働者たちと会ったときにも、それと同じ表情、喜びに満ち溢れた顔に出会った。」

これはイギリスで出版された書物『神は躓く』のなかのアンドレ・ジイドのエッセイからの引用で、そのなかでかつての共産主義者たちあるいはソビエト連邦の支持者たちが過去の見解を捨てている。

ロシア人のまわりにオーラのように存在するこの精神の暖かさは、ソビエト連邦を訪れた敏感な旅行者がすべて記しているものであり、このエッセイの著者も例外ではない。

私もまた私たちに寄せられるこの穏やかで優しい性格に魅せられた。しかし、これはレーニンやスターリンがもたらしたものでも、共産主義制度がソビエトの人民のなかに育んだものでもない。これはロシア人民の特徴の一部なのであり、トルストイやドストエフスキーやゴーリキーを読めばこの愛すべき優しさを再発見するだろう。

これらを読めば、より多くのこと、ツァーリズムとともに失われたと思っていた古きロシアの特徴が、ソビエト社会主義共和国でも存在し続けていることを再発見できる。そのひとつの例がインテリアだ。モスクワの中心部のホテルに宿泊するということは、少し奇妙なことだった。ほとんどすべての場合、私はそのプラシ天とシュロ、ほどよくほの暗い雰囲気で、古いフェニックス・ホテル（！）を思い出した。部屋には作り付けの棚と刺繍がほどこされた白い布で飾られた大きな椅子を挟んで隅々に眩い黄色のひだのついた絹のシェードがある。ベルを 7 回鳴らすと 70 歳以下ではないだろう給仕がやってきて、うやうやしく何か御用でしょうかと尋ねるが、そのストライプのリンネルの両肩に付いている金色のレース飾りに気づかないわけにはいかない。

すべての階の階段の前には年配の女性が座っている。彼女たちは演出にはおそらく必要はないが、しかしそこによくなじんでいる。鍵の入った引き出しがある机の後ろで、彼女は部屋に誰が入るのかを決めるのだ。彼女は頭からつま先まで黒地に白い飾りのついた服を着ており、動くとそれがガチャリと音を立てる。

理解できないことは耐えがたい

私たちが泊まった部屋の窓からはクレムリンの壁とルビー色の星がついた塔が見えた。16 のドームがある赤の広場のワシリー聖堂も眺めることもできた。とても奇妙で、外国人には醜いとも美しいともいいがたい。

醜いのか美しいのか、善か悪か、間違っているのか正しいのか？ 判断に迷うときが何度もある。前提条件が崩れているからだ。この異国の領土とその問題に触れたとき比較の根拠が崩れる。古くからあると同時に新しくつくりだされ、しかしそのすべてが私たちとはあまりに異なる環境に密接に関係しているので、それらを理解することは難しい。

かつて私が熱心にイタリアへの旅を語ったとき、今は亡きある有名な保守政治家が言ったことがある。「それは素敵だったかい？ 私はデンマークの国境の外に出たことがない。ここで起こっていることを把握するだけでも大変なんだ。だから他の国に出かけたとしても、自分は全然理解できないと思う。そして、私は自分が全然理解できない場所にいることが本当に好きじゃないんだ」。私はモスクワにいたとき彼の言葉を思い出し、そして初めてあまりにも奇妙で理解できないという耐えがたい感覚を抱いた。そしてそれは新しい国の新しい生活条件を経験しているという私の喜びにいくつかの場面で影を落とした。しかしそれはいくつかの場面でのみのことだった。なぜなら、つまるところモスクワで数日間を過ごし、広大な領土を飛行機で旅したことで、自分がかつてはわずかに想像していただけの**別の世界**に触れることができ、その光景や雰囲気を知ることができたからだ。

驚きがなかったロシアの孤児院

モスクワに着いた女性調査団が避けられないことがいくつかあった。そのうちのひとつは孤児院への訪問だった。私たちはモスクワから 20 キロ離れたところにある孤児院を訪問した。この孤児院は 1939 年に建てられ、3 歳から 7 歳までの子どもたちのための 130 の部屋がある。この孤児になった子どもたちのための家は、モスクワ郊外にある 55 の孤児院のひとつだ。太った黒い瞳の院長は微笑みながら、この小さな子どもたちは政府の教育計画により、注意深く組み立てられた時間割で育てられていると語り、政府とは何の関係もない子ど

もたちでいっぱいの風通しのよい部屋を指し示してみせた。同じことが保育士や教師たちにもあてはまる。かれらのトレードマークは微笑み、親切さ、優しい声だ。

子どもたちは私たちに歌や踊りを披露してくれた…。私はデンマークで多くの孤児院を訪れたことがあるが、ロシアの孤児院では何か心理的な衝突、何か**新しいこと**を感じるのではないかと予測していた。しかし、それは空振りに終わった。政府の時間割や子どもたちの養育はデンマークの孤児院と少しも変わるところはなかった。このモスクワ郊外の孤児院が最良のもののひとつだとすれば、私はデンマークにはより近代的で設備の整ったーより実際的で明るいが、より飾られていたり居心地がよいというわけではないー孤児院があるといわねばならない。大きな遊び部屋ではすべてのものが刺繍のほどこされた白い布で覆われていた。数え切れないほどの花瓶でさえ、白い垂れ布で飾られている。白くない唯一のものといえば水槽だけで、それは触れることができず透き通っていた。寝室では濃い色をしたベッドに雪のように白いカバーがつけられていた…。

壁からは、よく育った幸せそうな子どもを膝の上にのせて父親らしく微笑むスターリンが見下ろしていた。

赤い世界の神々

スターリンの肖像は写真、描画、絵画、彫刻など（ほとんどすべての芸術形式）になっているが、それは単に全ロシアの父たるツァーリとその配偶者を写した帝政時代の写真の代わりというだけでなく、ロシア人の祈りと願いを受け止めるべくあらゆる場所に飾られていた聖母マリアとその幼子イエスを描いた色鮮やかな聖像画の代わりでもある。現在では同じように祈りと願いを受け止めるためにスターリンの肖像が掛けられている。そして、赤の広場にある霊廟の棺のなかには、レーニンが聖者として安置されており、逆説的だが彼の子どもたちの現世的な必要を見守っている。

私たちはレーニンの墓の前の行列については知っており、何年も前からそのことを聞いたり読んだりしていたが、それでも自分たちの目でその列を見て驚いた。生徒たち、手にバスケットをもち頭にスカーフを巻いた女性や少女、兵士たち、ズボンをはいた太った男たちなど様々な人が並んでいた。**向こう側へと歩く人々**。

私たちはレーニンも見た。私たちの若い精力的な通訳は調査団の先頭に立ち、行列とは直角に入り口へと真っ直ぐに歩いていった。警備員に一声かけると、列の先頭の人々は動いて、私たちが通る道をあけた。かれらは腹を立てたのだろうか！ いや、明らかに違っていた。かれらは私たちを優しく興味深そうな顔つきで見ていた。われわれの聖地を見たいというこの外国人たちを歓迎しよう…。どうしてかれらが私たちのところにきたのかは皆目わからないが。

「私はこういうのは好きじゃない。少数の選ばれた人が並んでいる人々の先頭に行くことができるなんてレーニンの精神にはない」とオランダ人弁護士のヘイリゲルスが言うと、イギリス人のモニカ・フェルトンが意地の悪い笑みを浮かべて振り返り、自分がそうだったらどうする、と尋ねた。

この他には誰も笑うことはなかった。予想していたように行列はゆっくりと前に動き、まるでこの聖人が昨日死んだかのように哀悼を捧げ、そして墓を通りすぎていった。レーニンはー聖者であろうとなかろうと、歴史の中の巨人の一人であるー蝋人形のように横たわって

いた。強い投光機のライトがレーニンの頭からつま先までをすっぽりと包み、それが彼を保護するガラスよりも彼の世界と私たちの世界の境界線を描いていた。

レーニンは写真で見てきたとおりの顔をしていたが、死後の彼の顔は、ありし日の彼の顔を思い起こすと、当時よりもある種のはかなさがあり、穏やかで、さっぱりしている。彼の肌にはあらゆる異物が見える。それは薄気味悪いように思われるが、そのことを尋ねたとしてもーいや、それは死体ではない。命を悲劇的に断ち切られたような痕跡はなく、彼の周りには冷たさも腐敗もない。それはまるで彼の肖像を通りすぎたかのようだ。レーニンの頭は赤いダマスクス織の枕の上に寝かされており、その織物の折れ目が彼の頭で深くくぼんでおり、まるでこの墓のなかで生きているように思われる。

レーニンが眠っている部屋は大きくなく、壁は斑岩と黒い大理石でつくられており、私が思いだせる唯一の装飾品は石でつくられたパリコミューンの旗だけだ。

霊廟の入り口まで、また棺の傍にも警備員が立っている。彼らは直立して身動きしない。しかし、その目は決して休むことなく、訪問者の尻のあたりや手を凝視している。彼らが探しているのは爆弾や拳銃だ。お望みなら銃やその他の破壊兵器を鞄にしのばせてみてはどうだろう。

墓へと下る階段の茶色の大理石には温度計と湿度計がついており、おそらくはレーニンの遺体を保存するために適切な気温や湿度がきわめて正確に維持されているのだろう。墓は平日の午後にだけ公開されている。これは温度調節のためだといわれている。

モスクワで過ごした5日間で調査団が経験したことは何か？ もちろん地下鉄がー美しく、清潔で、そしてぞっとするような駅を備えた見事な地下鉄が走っていた。その見事さや重労働をナアアポアト駅*3にあてはめることはまったくできない。モスクワの地下鉄は人民への新しい社会の贈り物であり、かつては上流階級だけが宮殿のなかで楽しんでいた豊かさや喜びを享受するのが今では自分たち人民の番なのだということを大きく保障するものとみなさなければならない。そして、もし人民が新しい状況の豊かさを信じるならば、それは壮大に具体化されなければならない。そして、モスクワの新しい建築物の壮大さはーすでに建てられたものであれ、いま設計されているものであれー、ロンドンやパリではなく、ニューヨークを思い起こさせる。このもうひとつの新しい社会も、その豊かさを他の人々に納得させねばならないからだ。

写真：この少女はあまりロシア人には見えなかった。一方、彼女の保育士は家や街頭や遊び場や公園でよく見かける小さな子どもたちの保護者のようだった。

写真：レーニン廟への行列がこのくらいの長さであることは通常で、これより長いときもある。真正面がクレムリン宮殿の塔と見事な壁。行列の後方は赤の広場までにつながっている。

写真： モスクワの新しい庁舎のひとつ。典型的な新建築。

*3 コペンハーゲンの駅

スターリンがストックホルム・アピールを受け取った場所

クレムリン宮殿のなかに入ると、塔の上の星（直径5メートル）がルビーでつくられていることはもはや不思議ではなくなり、むしろそうでないほうが不思議な気がしてくる。クレムリン宮殿の輝きは赤の広場のワシリー聖堂の輝きに似ている。それは美の観念を超えたものだ。連れて行かれた聖堂のドームでは、格調高い部屋の雰囲気によって高みに連れていかれ、クレムリンの高い聖堂では、上祭服の背後の－あるいは聖書に隠した－拳のように珍しい宝石によって、ダイヤモンドをちりばめた子どもを抱く黄金の聖母によって、銀の聖者によって、世俗に結びつけられる。ビロードで覆われたふたつの台座のひとつにはかつて、フレデンスボルグから来て、全ロシア人の皇后陛下となった少女*4が座っていたのだ！

現在はソビエト最高幹部が住んでいるかつてのツァーリの宮殿のなかで、私たちは白と金色のホール、聖ゲオルギー勲章の間に向かった。壁には受勲した人々の名前が刻まれており、ツァーリはここで貴族や大使を謁見したのだった。スターリンが1950年の夏にストックホルム・アピールを受け取ったのもこの場所であった。

赤い罌粟（けし）

トレチャコフ美術館への訪問を除いて、私たちのソ連邦での唯一の芸術体験は、夜にボリショイ劇場でバレエを観賞したことだった。私たちは「赤い罌粟」という題名のバレエを見に行った。どのような話なのかと私は通訳に尋ねた。「自由のための中国人民の闘い、人民英雄になった踊り子の話です」。

この記事の筆者は、普段は立ってバレエを見ることは、大いに努力してもなんとか1時間半、それ以上は無理だ。－この「赤い罌粟」は4時間だったが、それでも長すぎるとは思わなかった。

このバレエは主演クリルコ、振付けロブホフ、音楽R・M・グリエール、美術エプシュタインで1927年に初演された。「赤い罌粟」がプロパガンダの一環であったことは無視できないが、その才能、美しさ、想像力、壮大さのそろい踏みに心奪われずにいることもまた不可能だった。

中国における共産主義の勝利の後、新しい結末がオリジナル・バージョンに加えられることになった。そこでは、可憐なタイ・ホアが夢のなかで人民の解放のときに出会う。そこで彼女は恋人である中国の自由の戦士に揺り起こされる。そこで彼女は再び人民の敵と闘い、社会主義の勝利のために活動し続けるのだった。新しい結末は中国の状況の進展によっている。革命は勝利したが、タイ・ホアは利敵協力者に撃たれて恋人の腕のなかで死ぬ。彼女はスポットライトのなかで頭上に赤旗がはためくなかで息を引き取り、オーケストラはインターナショナルを暗示する音楽をボリショイ劇場の屋根が持ち上がらんばかりの大音響で繰り返し演奏する。

タイ・ホアは弱々しげな手にロシア人の艦長からその肩の赤い星と一緒にもらった赤い罌粟を握っている。彼女の船はすでに出航していた。彼は中国の友人たちにその空腹を満たすための米を届け、かれらの革命的精神を激励するためにやってきたのだった。しかし、留ま

---

*4 デンマークのダウマー王女（1847年11月26日－1928年10月13日）。後のロシア皇后マリア・フョードロブナ

ってほしいと請われたとき、彼は悲しげに頭を振って、駄目だと答えざるを得ない。そのメッセージとはすなわち、革命は自分たち手で成し遂げなければならないんだよ、坊やたち。われわれはこれまでにしてきたこと以上の手助けをすることはできない。さよなら、幸福のなかでまた会おう、ということだ。

劇場は満員だったが、この最後のきわめて民族的で国際主義的な、ロシア人と中国人の共産主義の宣言の場面では誰もが立ち上がった。

スポットライトのなかで赤旗が波打つなか、幕が閉じるまで踊り手たちは彫像のように立ち続けている。

Møde med en ny verden. Tanker omkring K.D.Y.s internationale kvindekongres

新しい世界との出会い
ーWIDFの世界女性大会から考えたこと

Frit Danmark, Årg.12, nr.4(1953).S.9-10, 14-15
『自由デンマーク』1953年4号　9-10頁、14-15頁

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高巌　訳

国際民主女性連盟（WIDF）が開催した大規模な大会が「バランス」を欠いていたというのは事実だ。それは確かにそうで、このアンバランスな世界を正しく言い表している。この大会には地球上の67か国から611人の女性の代表団が参加した。

大会終了後の記者会見で、ニューヨークの全米女性通信社を代表してイドレシュセットでの諸会合に出席したあるアメリカ人ジャーナリストは次のように語っている。

> 「大会の決議は良い。しかし、東側諸国の代表団は自分たちの国の良いことしか話さず、他の国々からの代表団は自分たちの国の悪いところしか話さないことが気にかかった。このような基盤の上でどのように平和を確立しようとしているのか、私は不思議に思っている。言及されなかったが、アメリカにも良い点があることを私は知っているからだ。」

これは気の利いたコメントとはいえないが、ジャーナリズムとしては正当なもので、WIDF大会の真実の一部を明らかにしている。大会についての報道やいわゆるブルジョアおよび女性問題に関心を持つ一般の人々からの支援は限られたものであったからだ。

しかしながら、大会の指導者たちはこれについて責任をとることを拒んだ。デンマーク人の議長ルース・ヘアマンは、WIDFが招待した女性が全員参加していればバランスはより良いものになっていただろう、と語っている。「私たちは彼女たちに手紙を書いてぜひ大会に

参加して意見を述べて下さい、と呼びかけました。が、彼女たちの返事はそのような交渉には関心がないというものだったのです」。

こうしてもうひとつの真実が明らかになった。自国を支持する西側諸国の女性たちを招待するためにあらゆる手が尽くされたが、彼女たちは参加しようとしなかった、ということである。彼女たちが参加を望まなかったことは理解できるだろうか？ ーそうだ、実際そうである。それは賢明なことだったのか？ ー否。それは正しいことだったのか？ ー否。

しかし、それは理解しうることである。国際民主婦人連盟の書記長であるマリー・クロード・ヴァイヤン・クーチュリエは5月20日に『土地と人民』誌（デンマーク共産党の機関紙）の記事のなかで以下のように書いた。「女性、母親、労働者、そして市民」がそのタイトルで、それはきたる世界大会を力強く紹介するものだった。

ソ連や人民民主主義諸国で法律にもとづいて実際に施行されている男性と女性の平等に関する美しい実例を挙げ、封建支配および帝国主義列強の支配からの解放後の中国、朝鮮、ベトナムなどの諸国の急速な発展を強調した後で、クーチュリエ夫人はこう書いている。

> 「…資本主義諸国では、平等だけでなく、生きる権利のために闘わなければなりません。資本家たちは自分たちに最大の利益をもたらす戦争を準備しつつ、あらゆる手段を使って戦争による利益を確保しようとしており、このために労働者階級が社会的に勝ちとってきた成果を破壊し、植民地世界の労働者を最低水準の生存状態に留め置こうしているのです。
>
> 平和な世界で女性が実現しうることは、社会的権利の防衛・改善・拡張を目的に最近開催された会議で明らかにされました。戦争を準備している諸国では、高い生活費、低賃金、失業の増大など女性の状況はますます悪化しています。激しい闘いを通して実現されてきたものー例えば新しい法律などーは実際には実行されていません。政府に支援された経営者たちはこうした成果を攻撃し、自分たちが与えてきたものを何とかして取り戻そうとしています。しかし、平和な諸国では家族の生活水準は向上し、住宅、学校、病院の数は着実に増え、子どもたちの健康状態は改善されています…」。

これは世界大会を前にして任意の個人ではなくこの組織の書記長によって書かれた、疑いなく反資本主義的・親東側的な紹介であった。

これ以後、現在の状況では西ヨーロッパの女性平和団体が共産主義に直接に鼓舞されていると思われるこの大会に参加すると期待することはできなかっただろう。
適切なバランスの問題以外にも、会議で様々なことが起こったことは否定できない。例えば、スカンジナビアの女性と子どもたちの状況に関する欠点が、南米、アラブ諸国、アフリカ南部、東洋の人民が置かれている過酷な状況に匹敵しうるものとして提起されたー聴衆はそう理解したーが、それは私にいわせれば無意味なことだった。

デンマークその他での歯の治療の欠点が取り上げられたのだが、そんなことは学校で石をしゃぶって空腹をしのいでいる子どもたちをもつ女性たちの面前で語るのにふさわしいことだろうか。奴隷労働によって子どもたちの成長が損なわれている女性たちの前で、人身売買や強制売春を強いられている女性たちの前で…。

アメリカ人ジャーナリストが指摘したように、西側諸国からの代表たちが誰も長年にわた

る犠牲の上に勝ちとられた成果や政治的・経済的・社会的権利のための女性の解放闘争に触れず、東側諸国の代表が誰も自分たちの国のいかなる点も批判しなかったことは、悩ましいことだった。（残念なことにこれは東側諸国の代表たちの通常の、めったに破られることのない態度であり、東側諸国の代表は皆政府と一体であり、西側諸国の代表は皆自国の政府に反対しているというのが大会の状況で、それが公正でバランスのとれた大会という印象を損ねた理由である。）

女性の問題や各国の政策に関して、この大会を細かく批判することはできたかもしれない。しかし、誠実なオブザーバーたちは、その人道主義的な形式から、この大会を言葉の伝統的な意味合いにおいて女性の問題に関する大会だとみなすことをやめた。この大会の価値は別のレベルのところにあった。すなわち、それは過去に帝国主義の利害とレイシズムによって閉ざされた国境を越えた人類の結集の場となったのである。

ちょうどこの女性大会の最終日、ロンドンを訪問していたネルーは各国の記者たちにアフリカとアジアの状況について次のように語った。

> 「…世界のこれらの部分の市民は突如として政治的経済的な状況ゆえにかれらを取り巻いていた殻を破って登場した。かれらは政治的に覚醒し、より良い生活を望んでいる。かれらはダイナミックで、その心ははちきれんばかりだ。中国では偉大な革命が起こり、それがアジア、そしてー好むと好まざるとにかかわらずー世界に新たなパワーバランスをつくりだしている。」

大会はまさにこうした状況を理解する機会をー好むと好まざるとにかかわらずー提供したのだった。

共産主義者がこの大会を支配していた、と西側のオブザーバーたちはいう。ー「私たちはこの大会が共産主義者の目的に沿ったものではないかと不安でした」とハディプラボウド夫人は語っている。彼女は人民女性党からのオブザーバーとしてインドネシアからこの大会に参加しており、彼女自身もこの社会民族的政党の党員だ。「コペンハーゲンでの会合はすばらしい経験でした。私はためらいなくその女性たちを私の組織に推薦できます。私は彼女たちの活動に満足しています。私は彼女たちの活動に敬意を表します。彼女たちはインドネシアの女性として同じことを望んでいます。私たちは他の国々の人民との関係をつくりたいと願っています。私たちは彼女たちの平和への願いのなかで私たちの信念を確認したいのです。私はこの大会で生活様式および人民の可能性についての相互理解を証明することができたと思います。」

これはハディプラボウド夫人が、大会の演壇ではなく、筆者との打ち解けた会話のなかで語った言葉である。彼女は自分の国の共産党の活動について躊躇なく厳しいコメントを加えつつインドネシアの政治状況を説明した後でこのように語ったのだ。

被抑圧人民のレジスタンス運動は世界からの支援と理解を求めており、そして現在、かれらはその支援と理解を、政府の背後からその手をかれらに差し伸べている資本主義諸国の団体・個人とともに、共産主義国家と人民民主主義諸国のなかに見出している。

朝鮮の李承晩の同盟者である諸国において、人々がそれを好むと好まざるとにかかわらず、世界中の女性たちがコペンハーゲンに集まったということは歴史的な事実として確認された

のだ。

大会は東と西、北と南で女性を分断するステレオタイプとの闘いの一部であるとみなされることを望んだ。大会は、女性たちは互いを知り、互いを理解し認識することができたと述べている。大会がより広い展望を与え、代表団、オブザーバー、来賓など出席した全女性の間の諸問題をより自然に取り払ったことは疑いない。しかし、これらすべてをその心に満たすことが必要だった人々が出席しなかったことは悲しく大きな損失だった。

これに関連して、各決議の最終版にはすべての西側志向の女性たちが喜んで受け入れることができない内容は一行もないことに気づくだろう！

これは、大会の諸会合で失われたバランスーとりわけスカンジナビアとイギリスからーは決議を文章化する委員会でつくりだされたことを示しており、結局それは、この女性大会がこの闘う世界のなかに置かれていることの痕跡なのである。

写真：Fælledparkenでの女性会議

Grusomme udryddelseskrig - i Korea, Den' : Et forbillede for krigen in Vietnam

朝鮮での恐るべき絶滅戦争
ーベトナム戦争のための手本

Information, 1969-12-03
『インフォメーション』1969年12月3日

ケイト・フレロン／イーダ・バクマン　著
レアケ・シュタイマン／池田高巌　訳

1951年に朝鮮戦争を間近で経験した私たちにとっては、現在のベトナム戦争について読むと奇妙な感じがする。残酷さと虐殺は同じだが、西側の反応はまったく異なっている。人々はもはやかつて起こったようなやり方を支持していない。米国やイギリスの政府でさえ、ソンミ村虐殺に関する目撃証言に眉をひそめている。

1951年には誰も目撃者たちに気をとめなかった。彼女らは生命を脅かされ、職を取り上げると脅かされ、ある者は監獄に送られ、総じてまったく信じるに足りない人々だと宣告された。見てきたことを語った私たちは、もちろん「単なる」女性だった。女性たち、買収されない女性たちはそれだけで私たちの世界では「世間知らず」だとされた。

私たちがその明らかな痕跡を見たすべての虐殺について語るには多くのコラムが必要だ。しかし、そのごく一部を見るだけでもベトナムに関して暴露されたものに匹敵することが示されるだろう。

1951年5月23日、私たちは北朝鮮の首都平壌の南西、江西から遠くない新井面にある村を訪問した。村人に連れられて山を登ると、数多くの埋葬塚がある台地に着いた。塚は小さく、私たちの祖先の墓と同じくらいの高さだった。それらの塚は非常に新しく、まだ土もかぶせられていなかった。キム・ウンイクという30歳の女性は、私たちに自分の夫が埋められている塚を指し示した。彼女の夫は村の教員で、1950年10月にアメリカ軍がこの地域を占領するとすぐにアメリカ軍に脅されるようになった。そこで彼は山のなかに逃げ込んだ。するとアメリカ軍は彼女を人質にし、1か月間にわたって投獄した。彼女は夫が隠れている場所を話さなかったため、毎日殴られた。その後、アメリカ軍は夫を捕らえ、処刑した。アメリカ軍が退却した後、集団墓地のひとつから彼の遺体が発見され、後にこの場所に移され、朝鮮の慣習に従って丁重に埋葬された。

「なぜ彼は処刑されたのですか？」と私たちが尋ねると、「彼が民主的な学校で教えていたからです」という答えが返ってきた。

「アメリカ軍がやったというのは確かですか？」と私たちが尋ねると、彼女はそんな愚かな質問をされるとは思ってもみなかったという顔つきで私たちを見つめた。しかし、私たちは話の全体を理解するために聞かねばならなかった。彼女は短く「もちろんです。アメリカ軍です」と答えた。

「あなたを殴ったのもアメリカ軍ですか？」と私たちは尋ねた。彼女は答えた。「ええ、もちろん。アメリカ軍です」

キム・クムスンという61歳の女性は3つめの塚を指さした。「この地域で起こったことは言葉で表せません」と彼女は言った。彼女の夫、娘、義理の息子がこの塚の下で眠っている。かれらは皆、1951年10月24日に家から連れ出され、殺された。占領軍が12月にこの地を去り、遺体が大きな集団墓地のひとつから掘り出されたとき、娘は銃殺され、2人の男性は銃剣で突き殺されており、両手は切り落とされていたことが分かった。私たちがその理由を尋ねると、彼女は「私たちの長男は南朝鮮の党の幹部なのです」と答えた。いい換えれば、この3人は人質として処刑されたのだ。

「かれらを殺したのはアメリカ軍ですか、それとも李承晩軍ですか？」と私たちは尋ねた。「かれらを私たちの家から連行し、手を切り落とし、殺したのはアメリカ軍です。私たちはこの辺りで李承晩軍を見たことがありません。ここにいたのはアメリカ軍だけです」と彼女は答えた。

かれらは次々と肉体損傷や殺害について私たちに話した。しかし、私たちはただその話を聞くだけでなく、自分たちの目で墓地を見なければならなかった。この地域の多くの住人の後について、私たちは道の反対側の泰昌墓という小高い山に向かった。

木々に覆われた山の頂の近くで、私たちは幅1メートルのストライプ状に草木がなくなっていることに気づいた。私たちはそれに沿って歩いたが、その長さは50メートルから80メートルほどであった。血まみれの衣服や縄、衣服の切れ端、靴やベルト、硬い黒髪の束、アメリカ軍の薬莢、これらはこの山、この処刑で起こった集団虐殺の証拠だった。

私たちはそこで事実を知るべく、墓を掘り起こした。腐敗した遺体がいくつかの場所では2段あるいは3段に積み重ねられ、頭蓋骨と両手が打ち砕かれていたひとつの遺体を除いて、すべての遺体が手を後ろ手に縛られていた。その硬い黒髪、高いほお骨、衣服から、その遺体は朝鮮の農民たちのものであり、それ以外の何者でもないといえた。悪臭で息がつまりそうだった。ここ泰昌墓にはこのような集団墓地が8か所あった。

私たちと共に山に登ったこの地域の人民委員長リ・ヤンスクはまわりの6つの小さな山の頂を指さし、元々は木々に覆われていたこれらの山の平らなところが集団墓地だと言った。私たちはそれらも見たいかと尋ねられたが、村人の話に一致する証拠を知るにはひとつだけで十分だった。

1950年12月にアメリカ軍が南に退却しなければならなくなったとき、天候は寒かった。寒気に触れた山々からのぼる水蒸気で、この地域の住民たちはそれが集団墓地であることを知った。住民たちはそこに行き、墓を掘り返した。こうして300体の遺体の身元が確認され、私たちが先に見た塚に移され、埋葬された。しかし、殺された母親に背負われた姿で発見された20人の子どもたちー生きたままここに連れてこられたーは、この山の共同塚に埋葬せねばならず、その塚のてっぺんに墓標が立てられていた。

この地域を占領していたのはアメリカ軍第24歩兵連隊だったと私たちは聞かされた。人民委員長は10月20日から12月7日までの占領期間に殺された人々の公式の数を私たちに教えた。集団墓地から遺体が掘り返されると、個々の死因や拷問手段も明らかになった。以下が11平方キロメートルの信川面で受け取った数字である。

殺された人は1,561人。1384人は銃殺で、そのうち354人は8歳以下の子どもだった。57人は絞殺、50人は生き埋め、35人が殴り殺され、さらに35人が焼き殺された。

北部、東部、西部に向かった国際女性調査団の3つのグループは、占領軍による同じような処刑の写真や同じような虐殺の話を持ち帰ってきた。調査団はあちこちでアメリカ軍以外にも、アメリカ軍指揮下の李承晩軍がいたという話を聞かされた。あるところではイギリス軍やカナダ軍もいたという話を聞いた。

町を破壊した空爆の14日後に、かつて港町であった鎮南浦の瓦礫の山を通ることは、あまりにも大きな悲しみをともなうことだった。生き残った人々は朝鮮人の特徴である慎み深さや穏やかさをなくしていた。腕のない男性が爆撃でできた穴の淵に立ち、「アメリカ軍に復讐を！」と叫んでいた。私たちは少し歩く度に人々が殺された話を聞いた。

アメリカ軍は10月22日から12月5日まで鎮南浦を占領し、そのあいだに1,500人以上

の人々を殺した。私たちはある地下壕に案内された。占領軍は人々をそのなかに連行し、手榴弾を投げ込んで、人々を殺傷した。これは西側の新聞で報道されていただろうか？

鎮南浦は私たちが多くの人々にインタビューした場所のひとつだった。そのなかに、ホ・ヨンユクという 46 歳のプロテスタントの牧師がいた。彼はこの爆撃された町のなかで私たちのために提供された机の端に座り、私たちに占領について語った。アメリカ軍は南に撤退する直前、中国軍が鎮南浦に到着すればこの町の相当数のクリスチャンはひどい目に遭うという噂を広めた。また、アメリカ軍はいったん朝鮮から安全撤退した後、再び戻ってきて原爆を投下するという噂もあった。日本による長い朝鮮占領期、クリスチャンはその平和のメッセージのために迫害されており、そのために中国に関するアメリカの宣伝を信じがちだった、とこの牧師は言った。そのためクリスチャンたちはアメリカ軍と一緒に逃げ出そうとした。この町の最も大きな教会の牧師が逃げ出すための船を準備し、12 月 5 日に出航した。かれらがまだデッキにいるとき、アメリカ軍はかれらに対して空から銃撃を始めた。クリスチャンたちはこれは何かの間違いだと思い、祈りの言葉を捧げ、賛美歌を歌った。しかしそれは間違いではなく、発砲は続いた。275 人がその場で殺され、さらに多くの人々が負傷した。証言した牧師は朝鮮語で話し、通訳がそれを朝鮮語から英語に翻訳したのだが、この通訳はある箇所で言葉につまった。彼は言った。「牧師はその日はソドムとゴモラのようだったと言ったのですが、私はクリスチャンではないのでどういう意味かわかりません」。

私たちは港町である海州でも首都平壌でも同じような話を聞いた。1,000 人以上の人々がアメリカ軍の宣伝を信じ、平壌を流れる大同江の岸辺に向かった。かれらはそこでアメリカ軍の爆撃機によって撃ち殺された。「同じようなことがあらゆる港町でありました」と教育大臣の Che Den Zuk が私たちに言い、牧師もうなずいた。

北朝鮮におけるアメリカ軍の虐殺は他にも数多くあったが、ここではこれ以上書こうとは思わない。しかし、ナパーム弾、焼夷弾、時限爆弾などを使った大規模爆撃や、火を消すために水を汲みに行こうとした人々への銃撃など、私たちがいたるところで目撃した建物や人間に対する破壊・殺戮は、それが自分たちの手を血で汚す行為ではなかったとしても、ジェノサイドとみなされるべきであり、大虐殺と呼ぶべきだ、ということをつけ加えて置かねばならない。北朝鮮の外務相は、米国がその旗の下で戦争を遂行している国連にこれらの爆撃について報告した。国連からの返答はなかった。

また、女性調査団は全世界に向けてその報告書を発表したが、そこに述べられている事例を調査するそぶりを見せる政府はなかった。国連でさえそうだった。

何百万人もの人々ー米国の人々でさえーが、朝鮮での戦争についての私たちの情報に心を動かされた。しかし、マッカーシズムの時代には、政府やマスメディアはマッカーサー司令部と米国からのメッセージに一致した情報に従わねばならないと感じていた。それがドイツによる占領とそこへの服従からの解放からわずか6年しか経っていないデンマークでも起こったことは見るも苦々しかった。

ソンミ村の虐殺については 1 年半を待って調査が始まった。1951 年から現在で、どのような変化を導くのであろうか？ それはかつて人々を感嘆させたように米国の敗北ー最初は朝鮮で、今回はベトナムでーをもたらすことになるのか？ あるいは、それはベトナムで続く

戦争に反対する－米国および他の国々における－人民の立ち上がりか？ それとも、それは単に民主主義的思考にもとづく活動にとどまるのか？

今それを言えるだろうか、それとも否か？